

学生スタッフによるパソコン講座の運営と今後の展望について

今泉宇裕*1・吉川瑛一*2・北川雄大*3・溝口貴史*4

Email: renu-staff@coop.nagoya-u.ac.jp

*1: 名古屋大学情報文化学部社会システム情報学科

*2: 名古屋大学理学部数理学科

*3: 名古屋大学文学部人文学科

*4: 名古屋大学生協新入生サポートセンター センター長

◎Key Words パソコン講座, 大学生協, 連携

1. はじめに

私たちは、名古屋大学生協新入生サポートセンター学生アドバイザーReNU(リニュー)という生協の団体に所属している。(以下、「名古屋大学生協新入生サポートセンター学生アドバイザーReNU」を「ReNU」と省略して称することとする。)

ReNUの活動のひとつとして、生協が販売するパソコンを購入した新入生を対象としたパソコン講座を、毎年3~4月に開講している。この活動について報告する。

2. ReNUについて

ReNUの活動の主な目的は、学生アドバイザーとして新入生の入学準備のサポートをすることである。

主な活動内容は、生協加入の手続きや教科書の購入方法についての説明、一人暮らしを始める新入生に対する住まいの斡旋、大学生のためのキャリアデザインの講座運営、そしてパソコン講座の運営である。

ReNUのスタッフは現役の名古屋大学生及び名古屋大学院生約90人(2017年6月現在)から構成されており、実際の大学生活に基づいたアドバイス・サポートを実施している。

3. パソコン講座の目的

ReNUがパソコン講座を行う目的は、受講生である新入生がレポートやスライドを効率よく作成できるようになり、一足先に大学生活を知り、もっと楽しい大学生活を送れるようになってもらうためである。

5章で詳しく説明するが、パソコン講座のコンテンツ作成やテキスト作成等、講座の運営に関わるすべてをReNUのスタッフがやっている。そこには以下のような2つの強みがある。

1つに、名古屋大学生として生活していくうえで必要なスキルを提供することができることである。

2つに、3~4月という早い段階で、名古屋大学生の体験談を知ることができることである。

その結果として、パソコンに対する苦手意識を払拭し、パソコンを使って、より楽しい大学生活を送ってほしいと考えている。

4. パソコン講座概要

4.1 構成

パソコン講座は基礎講座とアドバンス講座の大きく

2つの講座から構成されている(図1)。

受講生が初めて受ける講座は、Windowsユーザーのためのセットアップ講座基本コース及びビギナーコース、MacユーザーのためのMac講座である。これらの講座では、主に初期設定やOfficeの設定等を行う。セットアップ講座ビギナーコースは基本コースの内容に、パソコンの用語説明・キーボード操作が追加された講座となっている。

活用講座は、PowerPoint・Excel・Wordの3部構成となっている。PowerPoint編では、自己紹介スライドを作成しながらSmartArtや背景の削除、Excel編では、関数を用いた表・グラフの作成、Word編では、参考文献や文末脚注等、スライド・レポート作成に必要なスキルを学ぶ。また、プレゼンテーション・レポートとはなにかという新入生の疑問を解決できる講座である。

上記の講座を基礎講座とし、より発展的なことを学びたい人に対してアドバンス講座を用意している。アドバンス講座は、プレゼンスキルアップ講座と理系レポート講座の2種類ある。

プレゼンスキルアップ講座は全学部を対象に、活用講座で学んだPowerPointのスキルを使い、実際にプレゼンテーションを行うことで、プレゼンテーションのスキルの向上させるための講座である。

理系レポート講座は、理系向けの講座で、大学での実験レポート作成を見据え、ExcelとWordを用いて、実際に実験レポートを作成する講座である。

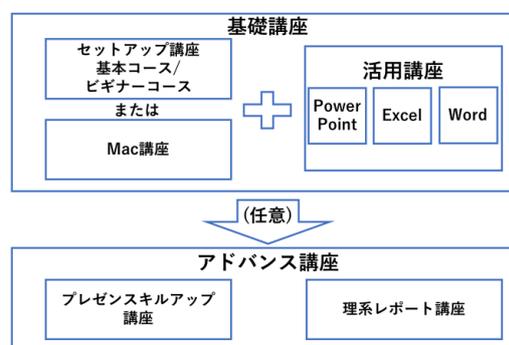


図1 講座受講の流れ

4.2 講座形式

パソコン講座の会場は1年生が大学生活で主に使用する講義室である。そのため、入学前に大学の講義室

の雰囲気を楽しむことができる。1教室あたりの受講生の定員人数は、セットアップ講座 12名、Mac 講座 30名、活用講座・理系レポート講座 60名、プレゼンスキルアップ講座 20名と異なるが、これらの講座を1教室当たり、講師1人と Teaching Assistant(以下「TA」と称す)数人で運営している。

パソコン講座では、実際の操作を通してパソコンの使い方を学んでもらうことを目的としている。そのため、操作追従とワークを組み合わせている。

操作追従は、講師が使用するパソコンの画面を講義室のスクリーンに映し、受講生がそれを見ながら講師の説明で操作を行う形式である。操作追従の形式だけでは説明が不十分な場面では、スライドを使って説明を行う。

ワークは、講座中に学んだスキルが定着しているか試す形式である。まずは受講生自身でワークに取り組み、受講生の様子を見て適宜ヒントを出し、最後に解説する。

操作追従とワークを組み合わせることは知識を定着させるという点では良い方法である。しかし、講師の説明に付いていけなくなる受講生や、どのようにワークに取り組みばいいのかわからない受講生も出てきてしまう。

そこで、こうした受講生のために TA が個別対応でサポートを行っている。TA は他にもタイムキープ等、講座運営の裏方的な役割も持っている。

5. 2017年度パソコン講座運営

5.1 組織体系

パソコン講座は ReNU のスタッフ全員で運営しているが、中でも PC チームが、以下に述べるコンテンツ作成・スタッフ育成・テキスト作成を主に担当した。

PC チームには、PC チームをまとめる PC リーダー・PC 副リーダーと各講座を担当する Windows チーフ・Mac チーフ・PowerPoint チーフ・Excel チーフ・Word チーフ・プレゼンスキルアップ講座チーフ・理系レポート講座チーフが存在し、2年生が担った。また、昨年度各リーダー・チーフを担った3年生が2年生のバックアップを行っている。1年生は決まった役職を持たず、2章で先述した活動全てに関わるようにしたため、パソコン講座では主に講師・TA として携わった。

5.2 コンテンツ作成

コンテンツ作成は各講座、チーフが昨年度の講座をベースに、主に5~11月にかけて行った。昨年度パソコン講座から改善するための機会としては、昨年度のアンケート・他大学生協へのパソコン講座見学、東海事業連合主催の各種研修であった。

他大学見学は、5月に岐阜大学生協及び三重大学生協の講座本番に見学させていただいた。

東海事業連合の研修として、8月のPC講座夏研修では各大学生協間で小規模のパソコン講座を行い、意見交流をした。9月のコンテンツ会議では、各大学生協のコンテンツの違いを確認した。10月のOffice研修・Apple研修では、生協外部の講師によるスキル紹介で自大学のコンテンツ作成のヒントとした。また、講座本番の

様子から、適宜内容の精査を行った。

5.3 スタッフ育成

スタッフ育成として主に練習問題とリハーサルを行った。

練習問題は、講師・TA 問わず、活用講座のアプリ一回分を月一ペースに実施するもので、スタッフのパソコンのスキルのボトムアップを狙うものだった。

リハーサルは、チーフと講師1対1でスクリーンを用いず自身のパソコンで行うリハーサルと、スクリーンを用いて1対1で行うリハーサルを1回行った。前者は、主にパソコン講座の流れを理解しているか、操作が正しいかの確認のために行い、後者は、主に講師としての立ち振る舞いや理由づけの確認のために行った。

また、講師・TA・受講生・オブザーバーを置いた全体リハーサルも1回を行い、本番さながらの状態での緊張感のもと、講師・TA の育成を図った。

5.4 テキスト作成

テキスト作成は各講座、主にチーフが昨年度のテキストデータをベースに、Windows テキスト・Mac テキスト・プレゼンスキルアップ講座テキスト、理系レポート講座テキストの4種類作成した。Windows テキスト・Mac テキストはそれぞれ、セットアップ講座とWindows ユーザー用の活用講座、Mac 講座とMac ユーザー用の活用講座のコンテンツが含まれている。

誤字脱字等のチェックは各チーフだけでなく、1年生を含む他のスタッフも携わった。

6. 現在のパソコン講座運営の改善点

6.1 スタッフの負担

現在のパソコン講座運営の改善点としてスタッフの負担の大きさが挙げられる。スタッフの負担は、「講座準備期の負担」と「講座期の負担」に大別できる。

「講座準備期の負担」はスタッフ間で異なる。5章1項で述べた通り、1年生が主に講師を務めるため、講座内容や講師としての立ち振る舞い等を講座毎に覚える必要がある。そのため、1年生にそれなりの負担はある。しかしそれ以上に、各チーフの負担が顕著である。

チーフがしなければならないこととして、5章で述べた通り、コンテンツ作成・スタッフ育成・テキスト作成がある。中でも、スタッフ育成とテキスト作成の負担が特に大きい。

スタッフ育成、特に講師育成のためのリハーサルであるが、講座の性質・受講生の人数上、セットアップ講座では15名、その他の講座(活用講座はPowerPoint・Excel・Word それぞれ)は、平均5名程度の講師を必要とした。リハーサルは一回の講座を通すため、フィードバックを含めて、2~3時間かかり、それが講師人数分、複数回ある。もちろん、チーフがすべてのリハーサルを見る必要はなく、他のスタッフに頼ることもあるが、他のスタッフにも必ずしも頼れるとも限らない。

テキスト作成も非常に時間がかかる。講座中及び講座の復習として使えるよう、講座の流れに沿ったテキストにするため、パソコンの画面上でスクリーンショットをとり、穴埋めを作成し、説明文を加える。特に

活用講座ではWindowsユーザー用とMacユーザー用それぞれ作成する必要もある。

もちろん各チームに時間とゆとりがあれば、すべてこなすことができるかもしれない。しかし、2章で述べた通り、ReNUの活動はパソコン講座以外にもあるため、時間的制限はある。

「講座期の負担」は、連勤が続くと身体的負担が大きいうことである。受講生に満足していただけるように、スタッフがベストパフォーマンスをするためには、スタッフの負担軽減の必要がある。

6.2 パソコン講座外部の視点の不足

現在のパソコン講座運営の改善点のうち1つが、ReNUのパソコン講座外部の視点の不足である。

5章2項で述べたように、コンテンツ作成時のヒントとして、昨年度のアンケート・他大学生協へのパソコン講座見学、東海事業連合主催の各種研修はある。しかし、それらのヒントを得る機会には制約がある。

他大学生協のパソコン講座見学ができるのは、その生協の講座期又はリハーサルを行う日である。しかし、他大学の講座期は名古屋大学でも講座を行っていることが多く、必ずしもスタッフを割けるわけではない。リハーサルに参加できるかにも日程的制約がある。また距離的な制約もあるため、何度も容易に見学に行けるわけではない。東海事業連合主催の各種研修も同様である。そのため、パソコン講座外部への視点が不足する。

他大学生協から名古屋大学生協へパソコン講座の見学に来ていただく場合も同様で、日程的制約・距離的制約がある。そのため、パソコン講座外部からの視点も不足してしまう。

昨年度のパソコン講座への意見をもらうことはまだ多い。しかし、昨年度のアンケートを反映させ作成した後に、その講座が本当に受講生にとっていいものなのか確認していただく機会は、極めて少ない。

7. 今後の展望

6章の現在のパソコン講座運営の改善点を基に今後の展望を3つ述べる。ここで述べるのは、他大学生協との連携によって成すものである。

7.1 テキストの統一化

今後の展望の1つ目が、テキストの統一化である。その理由は、主に3つある。

1つに、6章1項で述べたスタッフの負担を軽減する可能性があるからである。現状は、テキスト作成に労力が取られ、スタッフ育成に時間を割きたくとも、そうできない状態にある。また、名古屋大学生協以外に、テキスト作成の負担に苦しんでいる生協があるのも事実である。統一することで負担の軽減を目指したい。

2つに、他大学生協のパソコン講座と名古屋大学生協のパソコン講座のコンテンツに重なる部分が多いからである。プレゼンスキルアップ講座や理系レポート講座のような発展的な講座には独自性が強くテキストを統一化するのは難しいかもしれない。しかし、パソコンのセットアップやPowerPoint・Excel・Wordの基本的な操作では、重なる部分が多い。

3つに、パソコン講座テキストそのものの良さを向上できるからである。今まで自大学にはなかったコンテンツや、より良い説明の盛り込みができ、各大学生協でテキストのチェックをすることができるので、テキストそのものの価値を高められると思われる。

テキストをどこまで統一するのか、どの大学生協で統一するのか、何を使って作るのか、スケジュールはどうするのか等考えなければならないことはたくさんある。しかし、上記のようなメリットは存在するので、今後取り組んでいきたい。

7.2 クラウド等によるデータの共有

今後の展望の2つ目が、クラウド等によるデータの共有である。これは、6章2項で述べたパソコン講座外部の視点の不足を解消する可能性がある。

データの共有自体は、他大学生協と交流する際にいまでもしていた。しかし、データの共有をするのは、交流できる機会に限られ、その機会に参加できない大学生協とは、ほとんどデータの共有はしてこなかった。しかし、クラウド等を用いることで、参加できない場合でも共有をすることができる。

特に、役に立つのが、コンテンツ作成とリハーサルである。

コンテンツ作成の際にデータを共有することで、コンテンツ作成のヒントが増える。今まで通り自大学の講座をベースにするとしても、ヒントの絶対数が増えるので、パソコン講座外部への視点を増やすことができる。

リハーサル時にデータを共有するというのは、リハーサル実施時の最新データと、リハーサルを撮影した映像を共有するということである。昨年度から改善した講座が本当に受講生にとっていいものなのか、相互にフィードバックをすることで、今まで少なかった、その年の講座が受講生に届く前の改善が容易になる。よって、パソコン講座外部からの視点を増やすことができる。

このクラウド等によるデータ共有には、いつの段階でデータを共有するのか、共有した後にいつまでにフィードバックを行うのか等ルールを決めなければ、うまく機能しない。しかし、ルール設定後お互いに守っていけば、パソコン講座外部の視点を増やすきっかけになるとと思われる。

7.3 新規大学生協パソコン講座参入の容易化

今後の展望の3つ目が、新規大学生協パソコン講座参入の容易化である。

ここで、ReNUと同じく、生協が販売するパソコンを購入した新生を対象としたパソコン講座を、3~4月に開講している、名城大学生協の例を取りあげる。

名城大学では、名城大学生に実用的な知識を楽しく学んでパソコンを好きになってほしいという信念の基、Meijo enjoy like practical (略称は「Melp(メルプ)」)という学生組織が、2017年度の夏に新たに立ち上げられた。その際に、名古屋大学生協等のコンテンツ・テキストの共有、パソコン講座のリハーサル相互参加により、夏から3~4月という短い準備期間でパソコン講座とし

てきちんと成立させた。3~4月から翌年の3~4月にかけて、1年間通してパソコン講座を作成している ReNU と比べると、夏から始めて 3~4 月に本番を迎えるというのは、とても期間が短い。しかし、他大学生協で連携したことで、ReNU が学ばなければいけないと多くの点で思われるほどのパソコン講座を成立させたのである。

名城大学生協の例では、ReNU はコンテンツ・テキストのデータを渡すだけであったため、名城大学でコンテンツ・テキストの修正が必要であった。しかし、7章 1 項 2 項で述べたように、テキストの統一化・クラウド等によるデータの共有を行うと、より新規大学生協のパソコン講座参入が容易になると思われる。それにより刺激を受けることで ReNU のパソコン講座もより良くなることを目指したい。

8. おわりに

ReNU のパソコン講座が克服しなければならない問題は、6 章でも述べたとおり、スタッフの負担が多すぎることだ。これにより講座作成、スタッフ育成等にさける時間が限られてしまっている。

そこで今年度は、他大学生協と連携してテキストの統一化、クラウド等によるデータの共有を行い、スタッフの負担を軽減し、より講座作成や講師育成に力を入れていく。

来年の PC カンファレンスでは、今年から取り組む他大学連携についての成果を発表しようと思う。